



国立国会図書館デジタルコレクションで、「糟屋郡須恵村」を検索した結果を報告します。今回は前回と同じ741件がヒットしました。

『大日本地誌』第8巻に町内の蛇紋岩についての記事がありましたので、花崗岩の項に出てくる記事と合わせて紹介します。『大日本地誌』は理学士山崎直方・理学士佐藤伝蔵共編、博文館、明治44年（1911年）発行。第8巻は九州を扱っています。

「石材」の「主要産地の一斑を掲ぐべし」として、次のように続きます。専門的な難しい言葉が並びますが、石材の産地とその用途に触れているところに注目していきます。

「内は石瀧の補足です。採切は石を切り出すという意味です。」

▼花崗岩 福岡県鞍手郡岩ヶ崎に於ては、洪積層の赤土及び礫礫（川原の小石）によりて被覆せられたる中粒の角閃花崗岩に属する良材を産す。同郡金丸塔ノ下産のものは、山腹に横はれる岩塊を採切するものにして、其の地、犬鳴川沿岸に位するを以て、運搬の便

よく其質も亦佳良なり。此等も多く、垣石・建築等に使用す。同郡八尋・幸ノ浦に於ては、山間に円石となりて碌々たる粗粒の角閃花崗岩を採切し、板石・建築石等に供用す。嘉穂郡大門若林及び勢田大曲りに於ては、粗粒状の黒雲母花崗岩を採切して、華表（鳥居の柱）・石碑・垣石等に用ひ、企救郡朽網村字蛭子石及大石に於て採切する角閃花崗岩は石塔及び石垣等に使用す。筑紫郡太宰府町字別所に於ては、霽爛（風化）せる花崗岩中に転石として介在せるものを採切し、多くは橋石となす。糟屋郡須恵村佐谷の深間（谷間）に於ては、転石を採りて石碑・橋梁等に供用し、京都郡上黒田産は中粒の角閃花崗岩にして、石室佳良なり。採切して石塔・石垣等となす。同郡大村に於ては、字ヒトキ谷の深崖に露出せる部分を切り採り、華表・石段・石垣等を造るに用ふ。熊本県玉名郡内田村及び月田村に於ては、良質の花崗岩を産す。其の地菊池川に臨み、採石場より直ちに舟楫に載積すべし。此等の花崗岩は概して需要洽

からず「隅々まで行き渡らない」。僅かに所在四近に於て之れを応用するに過ぎず。

▼蛇紋岩 福岡県糟屋郡須恵村・篠原村（篠原村は所在不明）に於ける蛇紋岩は、主として橄欖岩より変質せしものにして、俗に青石と称して山腹に露出し、又は深間に横はるものを採切して墓石・玉垣等に使用せり。熊本県下益城郡下郷産のもの亦橄欖岩の蛇紋化せるものにして、竹葉状の紋様あるよりして俗に之れを竹葉石と称し、石碑・石燈籠等に使用す。同県玉名郡南関産のものは、閃緑岩若しくは斑礫岩の変質せしものにして、緑色白斑の文理を呈し、土俗葡萄石と称す。多く古来より裝飾石材として賞用し来れるものにして、石燈・碑石・卓子（テーブル）等に彫刻せられ、又水盤・皿・文鎮・台石其他種々の器具を製作し得べきも、価比較的貴きを以て其の需要洽からず。

佐谷の花崗岩は谷間に転がっている石を、石碑や橋の部材として利用していたようです。一方、蛇紋岩は山腹に露出したり、谷間に横たわるものが墓石や神社の玉垣に利用されてきました。

ところで『須恵町誌』（1983年）106ページに「須恵目薬製造工程」を紹介し、「原料は樟腦、竜腦と地元産出の滑石（温石）などが利用されました。温石は町外（村外）へも販売され、化粧品やビスケットの原料の一つであったとも言われています」と書かれています。

これは40年前に私が書いた文章で、「化粧品やビスケットの原料の一つであった」というのは、町内のある人に取材する中で、遠い昔の思い出として聞いたことでした。須恵町で江戸時代から戦後の一時期まで目薬製造が盛んに行われていたのも、元々はその原料である滑石が地元で採掘されていたことによります。

「札幌周辺の山や石の産地を巡る旅 札幌の石」というホームページに、富良野市採集の「滑石」が紹介されていて、その説明にこう書かれています。

筆記具として石板（粘板岩の板）に石筆（エンピツ状に切った蠟石や滑石）が広く使われました。今でも駄菓子屋さんに滑石の石筆が売られているのを見かけます。

という一節がありました。町内産出の滑石が石板に文字を書く石筆として用いられていたということも、古老の昔話として確かに聞いたことがあります。

わが町の蛇紋岩は、長崎県諏訪神社のこま犬や、戦後は陸上自衛隊第四師団の顕彰碑として、また沖縄県の福岡県戦没者慰霊塔の飾り石に使用されています。

滑石はかんらん岩が蛇紋岩に変質する時、蛇紋岩が熱水による交代作用や変成作用を受けた時に生成される鉱物なので、蛇紋岩のあるところに現れることが多いです。本サンプルも正に蛇紋岩の中にあつたものだろうと思います。蛇紋岩のある所、滑石あり、というわけです。

『須恵町誌』から滑石に関する記事を引用してみよう。わが町の鉱業は石炭をもつて代表されますが、石炭については別稿にゆずり、その他の鉱業として戦前の石材があげられます。

昭和三十九年十月野上鉱業株式会社太租工場が、上須恵東干田で町内産出の滑石から温石粉を製造し始めましたが、間もなく産出が終了したので、ほかから原料を仕入れて製造を続けています。（159ページ）

（蠟石は）明治に入ると本格的に使われるようになりまし。まず、学校教育が始まると、

「須恵町誌」から滑石に関する記事を引用してみよう。わが町の鉱業は石炭をもつて代表されますが、石炭については別稿にゆずり、その他の鉱業として戦前の石材があげられます。

石材は、青石（蛇紋岩）、花崗岩、滑石などで、特に青石は有名で、石材としてすぐれ、町内は勿論のこと香椎線新原駅や須恵駅から貨物列車で、遠く長崎や山口方面にまで、彫刻用石材として多量に出荷されていました。

従って石材彫刻も盛んで、村内には十数人の石工を職とする人が居ましたが、今では一人居るだけです。



写真① 須恵中央駅前の蛇紋岩



写真② 皿山公園の蛇紋岩(1)



写真③ 皿山公園の蛇紋岩(2)